

# 談話レベルから見た“politeness”

“Politeness theory”の普遍理論確立のために

宇佐美 まゆみ

## 1. はじめに

近年、“linguistic politeness”の研究が一段と盛んになってきているが、これは、“linguistic politeness”が、コミュニケーション、ひいては、互いの人間関係を円滑に進めていくための必要不可欠な要素であるという認識に基づいている。国際化が進み、対人コミュニケーションのみならず、国際コミュニケーション、文化間コミュニケーション等、広い意味でのコミュニケーションが、より身近で実生活にも関連する事柄となっている今日、様々な場面におけるコミュニケーションを円滑に進めるため、また、トラブルを最小限にとどめるためにも、“linguistic politeness”の普遍理論を探求することは、大変意義があると考えられていることにもよろう。普遍理論の模索に当たって、避けられない大きな問題点に、各言語に固有の特性（敬語を有する言語とそうでない言語等）をいかに扱うかということがある。そもそも“politeness”という用語自体、その学術用語としての概念を適切に表す日本語は存在しないといってもよいだろう（これについては、後に述べる）。本稿は、これまでの“politeness”研究の動向を概観するとともに、筆者の先行研究の結果に基づき、各言語に固有の特性を超えた共通の枠組みを確立するためには、今後“politeness”を、言語形式としての丁寧度や言語表現としての丁寧さという観点からだけでなく、談話レベルから捉え直すことが必須であるということを示唆するものである。

## 2. 日本における“politeness”研究

日本語においては、複雑な体系をもつ敬語が発達しているために、従来、敬語研究、或いは、敬意表現、丁寧表現の研究という形で、主に、言語形式とその相手、状況、場面に応じた言葉の使い分けに焦点をおいた研究が盛んで、膨大な研究結果、資料が蓄積されている。しかしながら、あまりにも豊

富な言語の形式にとらわれすぎる余り、その言語形式として表れた敬語が、用い方によっては、相手を不愉快にさせる（慇懃無礼等）こともあるというような、実際の言語使用における言語の機能面から、敬語やその他の言語行動をとらえようとした研究は、ほとんどなされてこなかったと言っても過言ではあるまい。

### 3. 欧米の“politeness”研究

一方、欧米では、最も多くの研究がなされている印・欧言語に、日本語をはじめとする東南アジア諸言語にあるような、語用論的に制約力を持つ敬語が存在しないこともあって、“politeness”を言語形式としての丁寧度といった観点から捉えるというよりは、ヨーロッパ語における人称代名詞の選択（tuとvousの使い分け等）に焦点を当てて、その背後にある人間関係とpolitenessの関係を分析したBrown and Gilman (1960)を発端に、主に、ある事柄を、直接的に言うか、間接的に言うかといったような、言語の表現方法を中心に、“politeness”をより広く捉えた研究が、様々な角度からなされてきた。Lakoff (1975)、Leech (1983)等、linguistic politenessの理論的枠組みを提示しようとした研究もいくつかあるが、中でも、最も包括的なものとして、ここ数年来、言語学者のみならず、文化人類学、社会学、社会心理学等、関連諸領域の学者の興味をも喚起してきているものに、Brown and Levinson (1978, 1987)の“politeness theory”がある。この理論が、部分的には批判を受けながらも、様々な分野の研究者の注目を浴びている主な理由は、彼らの理論が“linguistic politeness”と銘うちながらも、言語形式だけにとらわれず、人間関係、社会的・心理的距離、相手にかかる負担の度合い等、複雑に絡み合う諸要因を考慮に入れ、それらの相互作用の結果としての、言語行動における“politeness”をより包括的に取り扱っているからであると言えよう。このBrown and Levinsonの“politeness theory”を普遍理論確立のための共通の枠組みのたたき台として、以下にその概略をまとめる。

#### 4. Brown and Levinson の “politeness theory” の概略

Brown and Levinsonの “politeness theory” では、「面目 (face)」を基本的概念としている。すなわち、人間には、他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという積極的な欲求 — 積極的面目 (positive face) — と、賞賛されないまでも、少なくとも、邪魔されたり、立ち入られたくないという欲求 — 消極的面目 (negative face) — の二つの面目を保ちたいという基本的欲求があるとす。 “politeness” は、対話相手のこの二種類の面目を保つための戦略として規定されるとしている。例えば、「依頼」という行為を考えても分かるように、ある種の行為は、本質的に相手の「面目を脅かす行為 (Face Threatening Acts)」であると捉える。人に何かを依頼するということは、相手に時間や労力をかけさせることによって、相手の邪魔されたくないという消極的面目を脅かすことになると考え。 “Linguistic politeness ” は、この「相手の面目を脅かす行為 (FTA)」の度合いに応じて規定されるとす。すなわち、FTA の度合いが高ければ高いほど、よりpoliteな戦略を用いる必要があるとするのである。具体的に数量化できるわけではないが、この相手の面目を脅かす度合いは、三つの要素によって規定されるとして、以下のように公式化されている。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

$W_x$  : 「面目を脅かす行為 (FTA)の度合い」

D : 話し手 (Speaker)と聞き手 (Hearer) の「社会的距離 (Social Distance)」

P : 聞き手 (Hearer) の話し手 (Speaker)に対する「力 (Power)」

$R_x$  : 特定の文化で、ある行為が相手にかける「負担の度合い (Ranking of impositions)」

また、ここでは紙面の都合上、詳しく述べられないが、Brown and Levinson (1987)には、FTAを最小限にとどめるための戦略として、

5つの主要ストラテジー、さらに細かく分類したサブ・ストラテジーが詳細に記述されている。

## 5. “politeness” に代わる用語の必要性について

以上に概観した Brown and Levinson の理論の枠組みでは、相手に親しみを表すために冗談を言ったり、同じ集団に属することを示すためにスラングを使うことは、“positive politeness” として捉えられる。この枠組みでは、日本語において、親しみを表すために丁寧体ではなく常体を用いることは、“polite” だということになる。しかしながら、それを日本語で「丁寧」と訳すと、どうしても日本語の語感にそぐわないことになる。事実、Ide et. al (1992) は、アメリカ人が polite と friendly の意味をかなり近いものとして捉えているのに対して、日本人は、「丁寧」と「親しげな」をむしろ相反するものとして捉えているという調査結果を報告している。Brown and Levinson で扱われている “politeness” は、ある言語使用の機能に注目した「語用論的 politeness」であるといえるが、それを敬語を有する日本語に当てはめると、言語形式の丁寧度(「食べる」より「召し上がる」の方が丁寧度が高い等)と語用論的 politeness が相反する場合(慇懃無礼等)も多々あるため、大変まぎらわしくなる。英語においても、最近では「対人コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジー」という側面を重視する最近の研究動向をより反映させるには、相手に対する配慮、気配りの法則として、“theory of considerateness” という捉え方をした方がよいのではないかという指摘 (Green, 1992) や、“politeness as appropriate behavior” として捉える研究も出てきており (Walle and Poel, 1993)、再考の余地のあるところである。本稿では、なるべく誤解が避けられるよう、あえて訳語は当てず、「Brown and Levinson で扱われている」という意味で、“politeness” とした。

## 6. 普遍的であるとして提唱された Brown and Levinson の理論の問題点 包括的ではあるが、“politeness” をFTAを最小限にとどめるための「スト

ラテージ」として捉える Brown and Levinson の理論には、以下の二つの主要な問題があると思われる。

- (1) 特に、文レベル、発話行為レベルで見ると、日本語等、語用論的に制約力を持つ複雑な敬語体系を有する言語における言語使用を、うまく説明していない。
- (2) 最近とみに重要性が認識されている談話レベルにおいて “politeness” を捉えるという視点に欠けている。

以下に、筆者のいくつかの先行研究の結果を概観しながら、言語行動における “politeness” の談話レベルにおける分析結果を Brown and Levinson の理論に関係づけて論じる。

## 7. 談話レベルで捉えた “politeness”

日本の敬語研究で従来よくなされてきたような、例えば、「あなたはどこへ行くか」と尋ねるときの「行くか」を職階や年齢等の違う相手に、それぞれ何と言うかという形で答えさせるような方法では、特定の状況下における文レベル、あるいは、発話行為レベルにおける言語形式の使い分けに関する知見は得られるが、あるまとまりと長さをもった実際の会話の中で生じる、同一人物に対する尊敬・謙譲語の使用と不使用、丁寧体と常体との混用等がどうして起こるのか、また、それらの混用がいかなる機能をもっているのかというような、話者の自発的な言語形式や語彙の選択等の、ストラテジック (strategic) な言語使用については考察することはできない。筆者は、あくまで実際の言語使用の中で、どのような “politeness” のストラテジーが用いられているか、また、それが相手に応じていかに使い分けられているかを分析するために、ベースの被験者の、それぞれ初対面同性の「目上」、「同等」、「目下」の相手との会話を、いくつかの角度から分析した (宇佐美、1993a; 1993b; Usami, 1993)。その結果によると、この3種の初対面の相手との会話においては、目上との会話では 100%、同等との会話では78%、目下との会話では80%が、比較的頻度の高い尊敬・謙譲語を含むか、丁寧体を用いた発話となっていた。すなわち、全体的に見ると、内・外の概念に基づ

いて、初対面の相手には、相手の年齢・社会的地位にあまり関わりなく丁寧体を用いるという、文レベルの敬語使用の原則に則した結果となっていた。つまり、この結果は、日本語の文レベル、発話行為レベルにおける敬語使用の原則を、スピーチレベル（常体、丁寧体等）の使用頻度の平均値が支持しているということである。逆に言うと、この結果は、Brown and Levinsonの、この特定の状況下においては、相手の年齢・社会的地位が高いほど丁寧なストラテジーが用いられるであろうという予測にそぐわないことになる。

ただ、ここで、より注目されなければならないことは、むしろ、丁寧体が原則とされている初対面の相手との会話においても、実際には、ほとんどの会話で、常体が用いられているという事実である。このような原則からはずれるスピーチレベルの使用は、自発的・方略的 (strategic) な言語使用とみなすことができる。この原則からはずれるスピーチレベルの使用を、談話レベルにおいて、規範的なスピーチレベル（ここでは丁寧体）から、そうでないスピーチレベル（ここでは常体）への「スピーチレベルシフト」、すなわち、方略的な言語使用として捉え、その頻度と割合を算出すると、相手の年齢・社会的地位が高いほど、丁寧体から常体へのスピーチレベルシフトが少ない、すなわち、より丁寧なストラテジーが用いられているという結果になっていた。これは、Brown and Levinsonの理論の予測にほぼ沿ったものといってもいいだろう。ただし、同様の形式で異性との会話を加え分析すると、異性との会話では、丁寧体から常体へのスピーチレベルシフトが全体的に少なくなっており（宇佐美、1994（予定））、Brown and Levinsonの理論では取り立てて扱われていない「性」の要因を、どう扱うかが、今後の課題として浮かび上がって来る。

以上に述べた一連の研究（宇佐美、1993a; 1993b; Usami, 1993）では、“politeness”にかかわる談話レベルの要素として、「話題導入の頻度」も取り上げ、ベースの被験者と初対面同性の目上の相手との会話においては、目上の相手の話題導入の頻度が高く、同等の相手との会話では、話題導入の頻度はほぼ同じになり、目下の相手との会話においては、ベースの被験者（目上に当たる）の話題導入の頻度が高くなるという結果も報告している。

会話後の被験者の内省には、「目上の相手に対して自分の方が話題を導入していくと失礼になると思い、相手に合わせるよう努めた」等、相手と円滑な関係を保つための戦略としての“politeness”にかかわるものも多く、「話題導入の頻度」という談話レベルからしか見られない要素が“politeness”に関係しているという筆者の予測を裏付けていた。ただ、被験者の数が十分とは言えないため、これらの研究は、現時点ではケーススタディーとして扱われるべきで、短絡的に結果を一般化することは避けねばならない。しかしながら、これらの結果が示唆する重要で興味深いことは、Brown and Levinson の理論は文レベル、発話行為レベルで“politeness”を捉えると、敬語使用の原則に制約される日本語には当てはまらないが、談話レベルで“politeness”を捉えることによって、方略的な言語使用も対象内に含まれてくると、当てはまりやすくなるということである。

#### 8. “politeness” 研究における今後の課題

以上、現時点では、最も包括的だと思われる Brown and Levinson の“politeness theory”の枠組みを借りながら、日本語の会話における談話レベルにおける“politeness”分析結果を検討し、“politeness theory”の普遍理論確立のための方向性を考察してみた。従来、敬語を有する日本語のような言語においては、言語形式に反映されている敬語の使用法が、敬語使用の原則に制約されているため、方略的 (strategic) な言語使用の余地があまりないと主張されてきた (Ide, 1989; Matsumoto, 1988等)。しかしながら、本稿で考察したように、日本語においては、談話レベルの要素に、個人の方略的な言語使用の余地が多分に残されているといえる。すなわち、視点を変えれば、日本語では、言語形式の選択の余地が敬語使用の原則に制約される度合いが高いだけに、かえって、そういう制約を受けない談話レベルの要素、すなわち、スピーチレベルシフトや話題導入の頻度等の方に、より顕著に個人の方略的な言語使用が反映されていると考えられるということである。日本語のような敬語を有する言語においては、“politeness”は、敬語使用の原則の制約と個人の方略的な言語使用との相互作用の結果として捉

えられるべきである。

従来の日本の研究は、言語形式に焦点を当て、その場面、相手、状況に応じた使い分けの記述や、それに基づいた敬語使用の原則を打ち立てることに労を費やしてきた感があり、言語使用の機能を考慮した語用論的“politeness”という視点からの研究はあまり行われてこなかったといえる。一方、欧米の“politeness theory”は、言語の方略的な使用という側面にのみ焦点を当て、敬語を有する言語における敬語使用の語用論的制約については無視してきた感がある。さらに、双方に共通した問題点は、日本の伝統的な研究も、欧米の“politeness”研究も、共に、文レベル、あるいは、発話行為レベルでしか“politeness”を捉えてこなかったという点である。日本語の文レベル、発話行為レベルにおける適切なスピーチレベルの選択については、当然ながら、これまでの日本での研究成果としての敬語使用の原則の方が、Brown and Levinsonの理論より、現象を適切に説明する。しかしながら、敬語使用の原則だけでは、同一会話内の、同一人物に対する敬語の使用と不使用等のスピーチレベルシフトについては、説明することはできない。“Politeness”を言語行動における“politeness”という、より広い観点から捉えた「談話レベル」における研究は、これまで欧米でもあまりなされてこなかった。しかしながら、本稿で考察してきたように、方略的な言語使用に焦点を当てた欧米の“politeness theory”は、日本語においては、皮肉にも、“politeness”を談話レベルで捉えたときにこそ、より当てはまりやすくなるといえそうだ。今後、これまで、主に、欧米で発展してきた“politeness theory”を、日本語のような、語用論的制約力を持つ敬語を有する言語における言語使用をも、よりの確に説明しうるものにし、真の普遍理論を確立するためには、談話レベルにおいて“politeness”を捉えること、また、そうすることによって、敬語を有する言語における敬語使用の原則の制約と自発的・方略的な言語使用との相互関係を解明していくことが必須であるといえよう。



## 引用文献

- Brown, R. and Gilman, A. (1960). The pronoun of power and solidarity. In T. A. Sebok ed. Style in Language : Cambridge : MIT press and John Wiley & Sons, Inc. 253-276.
- Brown, P. and Levinson, S. (1978). Universals in language usage : politeness phenomena. In Esther N. Goody. ed. Questions and politeness. Cambridge University Press. 56-311.
- Brown, P and Levinson, S. (1987). Politeness : Some universals in language usage. Cambridge University Press.
- Green, G. (1992). The universality of Gricean accounts of politeness. Lecture presented at the 1st Conference of Pragmatic Association of Japan. Tokyo.
- Ide, S. (1989). Formal forms and discernment : two neglected aspects of universals of linguistic politeness. Multilingua 8. 223-248.
- Ide, S. Hill, B., Carnes, V.M., Ogino, T., and Kawasaki, A. (1992). The concept of politeness : an empirical study of American English and Japanese. In Watts, R. J. et al. eds. Politeness in language : studies in its history, theory and practice. Berlin :Mouton de Gruyter.
- Lakoff, R. (1973). The logic of politeness : or minding your p's and Q's. Chicago Linguistic Society 9. 292-305.
- Leech, G. (1983). Principles of pragmatics. New York : Longman. 『語用論』、池上・川上訳、紀ノ国屋書店。
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face : politeness phenomena in Japanese. Journal of pragmatics 12, 403-426.
- 宇佐美まゆみ (1993a). 「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー : 話者間の力関係による相違 - 日本語の場合」、ヒュー

マン・コミュニケーション研究、第21号：25-39.

宇佐美まゆみ (1993b). 「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」、『学苑』（昭和女子大学近代文化研究所）、第647号：37-47.

宇佐美まゆみ (1994予定). 「スピーチレベルシフト生起の条件と談話：機能レベルから見た敬語使用の分析」、『学苑』（昭和女子大学近代文化研究所）、第651号掲載予定.

Usami, M. (1993). Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people : influence of power asymmetry. Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics. Amsterdam. August 8-14.

Walle, L. Van de and K. Van de Poel. (1993). Where East meets West and the classical world meets contemporary society : politeness as appropriate behavior. Paper presented at the 4th International pragmatics Conference. Kobe, Japan.